

まず、考えよう！

松浦 純子

ある小学校での出来事を聞いて、びっくり。これでいいのだろうか、自分の心だけには納めきれず、誰かに話したくなった。それは、「さあ、〇〇を作りましょう」という先生の合図でほとんどの子供たちが我先にタブレットを取り出し、googleで〇〇を検索しそのページを開いた。何の躊躇もなく、そのデザインを自分のものとし、作品を作ったというものだった。上手、下手の話ではない。大人の私は、著作権侵害も心配してしまう。人間である以上タブレットを開く前にわずかでもいいから、自分で考えて欲しいと思った。

十六世紀末にフランスに生まれたデカルトは、「我思う、ゆえに我あり」ということばを残した。ラテン語を勉強すると最初に出てくる文である。また、同じくフランス人のパスカルはデカルトに約三十年遅れて生まれた。「人間は考える葦である」ということばは、だれでも聞いたことがあるはずだ。二人ともルイ十三世、十四世というフランスの絶対王政の最盛期に活躍した。デカルトは体の具合が悪い中、ストックホルムに渡り最後はそこで亡くなった。パスカルは、一〇九五年にローマ教皇ウルバヌス二世が「神はそれを望んでいる」と十字軍派遣の大演説を行ったクレルモンで生まれ、パリで亡くなっている。二人とも考えることこそ人である所以だといっている。

十年位前にある中学の先生が、講演会に行きそこで聞きかじったことを得意げに話してくれた。「AIがあれば、覚える必要はないし、考える必要もない。全てAIが正解を教えてくれる。これこそ二十一世紀の教育だ」。その時間いた例は、「どうやったら効率のいい〇〇を作れるか」だったと思う。まだファクトチェックとか偽情報とかの話はそんなに聞かれない時代だったが、自分で考えて正誤を判断できず何でも信じてしまう子供にならないければいいが、と心配し私は反論した。その時に用いた例が、前述の十字軍派遣についてである。「十字軍はなぜ失敗したのかとAIに聞いて、その答えを理解もせずそのままレポートに書いたら、それは自分で考えたことになるのか」に対して、その先生の返事は、「なる」だった。

現在、その先生の学校では、一人一台ずつのタブレットで、理解度に応じた学習をさせている。「先生は教えないでください。自分で学習させてください」という指示が出ているそう。途中でつまずいた生徒は質問しづらく、結局そういう生徒は授業中遊んでいるということだ。